

ボアジチ大学 交換留学報告書

静岡県立大学 国際関係学部 国際言語文化学科

3年 英米コース

準備期間を含めると約2年、先週の帰国をもって私の留学計画は完了した。最後に名残惜しくトルコの景色を眺めたのは、1年前に初めてトルコの空気を吸ったのと同じアタチュルク空港だった。中学生の頃から夢見ている留學生活が終わってしまった。憧れの海外留學の舞台が、まさかトルコになるなど私自身もまったく予想外である。だが、トルコに対するホーム意識は強く、トルコにまた帰りたい、トルコを選んでよかったというのが一番強い感情である。

渡航前、私のトルコに関する知識はゼロに近かった。恥ずかしながら地理関係もあやふやで、ましてやトルコ語など挨拶ひとつ知らなかった。更に、行き先を友人や親せきに報告すると、誰もが近年のテロを思い浮かべ治安を心配した。ところが、幸か不幸か私自身はトルコ留學に対して何も心配していなかった。それは、長年の計画がついに実現する嬉しさと、実際には実感がないゆえにふわふわした夢のような気持ちで過ごしていたからかもしれない。実際に渡航し、トルコで過ごす毎日は何気ない日常すべてに驚きや戸惑い、刺激、発見、時には恐怖も詰まっていた。毎日が未知との遭遇で、一瞬で終わってしまうのである。帰国したいま、誰もが「おかえり」の次に必ず「無事でよかった」と身を案じてくれる。こうしたみんなの温かいことばやほっとした顔を見てやっと、私はなにかすごい場所で、すごい留學経験をしてしまったのかもしれないと思うようになった。

トルコでの生活を思い返して、真っ先に思い浮かぶのは毎日きいていたアザーンである。アザーンとはイスラム教の礼拝時間になったことを知らせる歌のような呼び声で、1日5回モスクについている拡声器から大音量で流れる。宗教や人間の信仰心について興味がある私にとって、イスラム教が毎日の生活に根強く結びついているトルコでの生活は本当に刺激的であった。ムスリムと同じ環境で過ごしたこの1年間で、イスラム教徒、特にトルコ人の真の宗教観を知ることができた。日本で売られている旅行雑誌やガイドブックには、トルコ人の9割がイスラム教徒であるという説明をよくみる。ところが実際には、この数字は手続き上のものに他ならず、本当に信仰している人は国民の6割5分にとどまることを実感した。実際に私の友人関係を振り返ると、無信仰の友人の方が多いくらいである。さらに、私にイスラム教のことをなんでも教えてくれたムスリムの友人は、いつも「誰も強制されることはない、私も誰かを感化して信仰してほしいなんて思わない」と語

った。たとえ親でも子に信仰をすすめることはないらしく、確かに親がムスリムでも私は違う、というケースもあった。もちろんこれはトルコの話であり、国や地域によっては厳格な場合もあると思う。だが、少なくともトルコのイスラム信仰について、大きく印象が変わった瞬間だった。特に家族であれば、誰もが同じく熱心に信仰するという勝手なイメージがあったが、自分の意志で神とつながっているという点でどこか親近感をおぼえた。

イスラム教に関して、断食期間中にも大きな発見があった。断食中のある日、脇を走行中のバイクが私の乗っていたバスと何かもめたらしい。怒ったバイクの運転手がバスに乗り込み、運転手と殴り合いが始まった。屈強な男性陣が止めに入ってもおさまる気配はなく、運転席から離れた場所にいた私でさえも恐怖を覚え一人でおびえていた。すると、ヒジャブを被った女性が堂々と間に入りバイクの運転手を言葉で諭し、その喧嘩を見事に止めた。実は、断食期間中に悪口や争いごとをすることは最も卑しく恥ずかしいこととされており、この期間にはすすんで他者に良い行いをする習慣がある。こうした教えがあることは知っていたが、実際にそれを目の前にして初めて、コーランや教えの上だけでなくどのように実行されているのか実感をもって知ることができた。

帰国して初めて気づいた自分の変化も多くある。一番大きいのは性格の変化である。もともと私は平和主義で、怒るエネルギーがもったいないと自分で自分を諭して負を消化してしまうような性格だった。それが、今では不満や正しくないことに対して疑問をもち、きちんと反論できるようになった。これは間違いなく、トルコで何度も味わった理不尽な経験がそうさせてくれたのである。電車やバスで日本語を話すときにやつきながら真似をされたり、主張のはっきりしているお国柄ゆえなのか、仲良しのルームメイトにさえ「寿司や生魚を食べるのは気持ち悪い」と嫌な顔をされたこともある。そんなことをされてもいつも通りあしらっていた私が、人生で一番激怒したのはまさかのトルコ移民局だった。誰もが肩の力を抜き、必要最低限のことがなされていれば大丈夫というトルコの生活スタイルは、せわしなく働く日本からきた私には理解しがたい異文化であった。移民局のような国の重要機関でもそうした働き方が当たり前であり、現地の人には誰も文句を言わない。それが当たり前だからだ。だが、移民局の勝手な判断で私の在留許可書が失効したこと、彼らの仕事が遅く（彼らに言わせれば“焦ることはないから”）事態が直前になって発覚し

たこと、決まった対応を共有していないため1日中たらいまわしにされ、挙句の果てには「そんなに慌てなくてもね」と呑気に笑われたことは、私の温厚な性格を一瞬で変えてしまうくらい衝撃的なものだった。この一件以来、自覚は全くないが私はおかしいと思ったら口に出して意見を言うようになったようである。日本に帰国してから他人に指摘され、初めて気づいた変化だった。これから社会に出て波にもまれ、何度こうした理不尽な経験をするのか分からない。だが、私にはトルコでの経験、成長という武器があると思うと、なんでもかかってこいと強い気持ちになれる。トルコ留学は私に、見えないけれど人間として大事な変化までもたらしていた。

何を思い出しても、最終的にたどり着くのはこの留学が実現したことへの感謝である。静岡県立大学とボアジチ大学の提携には歴史があり、その点で私費留学と大きく違うのは準備段階からたくさんの支援やサポートをしていただけることである。短期留学を経て長期留学に臨む人も多い中、私の場合はこのトルコ長期留学が留学初体験で何も知識がなかった。そのため、丁寧な留学前ミーティングや健康増進室の方による海外生活の心得レクチャー、そして後援会様からの助成金はとてもありがたく、安心して渡航できた理由の一つである。

トルコという日本と全く異なる地で過ごしたこの1年間は、今までの人生の中で特別色濃く私の中に刻まれている。中学生の時に思い描いていた留學生活とは、いい意味で全く違うものになった。長年学んできた英語で何か挑戦したいという夢は、国内トップの国立大学ボアジチの講義で秀(AA)をいくつもとったことで実現した。興味があった信仰心や宗教観については、そもそも異国に住むだけでも日々感じるものがあつたが、現地での実体験そして熱心に誇りをもってイスラム教を語ってくれた友人のおかげで学びが深まった。この1年、現地語を全く知らなかった私が異国での生活を思い切り謳歌できたのはほかでもない、愛情と親切心に満ちたトルコの人々のおかげである。携帯が使えない、道も知らない、もちろんトルコ語を知らなくても必ず誰かが助けてくれる。この国には困った人を無視したり見捨てる人はいない。トルコ最終日、重すぎるスーツケースを当たり前のように運んでくれたのはやはり、見ず知らずのトルコ人だった。最後の最後まで彼らの優しさに甘え、お礼の次に思わず口から出た言葉は「また必ず帰ってくる」だった。